

五山送り火のはじまりは明らかではないが、一説には、室町時代後期、当時、盛んに行われた万灯会が、次第に山腹に点火され、^{うらぼんえ}孟蘭盆会の大規模な精霊送りの火となったのが起源といわれており、洛外の村々が洛中に向けて行った宗教行事ともいえる。文献に登場するのは慶長8年（1603）の公家の日記で、お盆に鴨河原から山で焼かれた大文字や妙法の灯を見物したと書かれている。現在、点火の儀式や薪の管理などは、各山麓の町の人々が保存会を結成して維持している。

「大文字送り火」は、銀閣寺近辺の旧浄土寺村の人々が大文字保存会を組織し、維持している。

銀閣寺は正しくは^{じしやうじ}慈照寺といい、その通称は観音堂の別称「銀閣」に由来する。文明14年（1482）、戦乱で荒廃した浄土寺跡に、足利義政が東山山荘を造営したことにはじまる。翌15年に^{つねのごしよ}常御所が完成し、後土御門天皇より「東山殿」の名を賜り、その後、銀閣（観音堂）は長享3年（1489）に上棟した。

大文字保存会では、銀閣寺（慈照寺銀閣他：国宝）山門の前で、一般市民から、先祖の供養や現存する人々の利益を願う護摩木を受け付け、集められた護摩木は、送り火の点火材料として山上にある火床へ上げられる。大の字の中心に位置する火床である^{かなわ}金尾に隣接する弘法大師堂に灯明がともされた後、大文字寺と呼ばれる麓の浄土院の住職と保存会員によって般若心経が唱えられる。午後8時になると、竹に麦わらを結びつけ、松葉を先につけた松明に灯明の火を金尾にある親火をうつし、大の字の中心に点火された後、合図によって一斉に点火される。

「松ヶ崎妙法送り火」は、松ヶ崎妙法保存会によって維持されており、日蓮宗（法華宗）の信仰に厚い地域であることと密接に関係する行事である。点火の際、「妙・法」の山では、松ヶ崎堀町にある^{ゆうせんじ}涌泉寺（市指定登録有形文化財（建造物））の住職や松ヶ崎立正会会長らが読経し、^{それい}祖霊を送る。

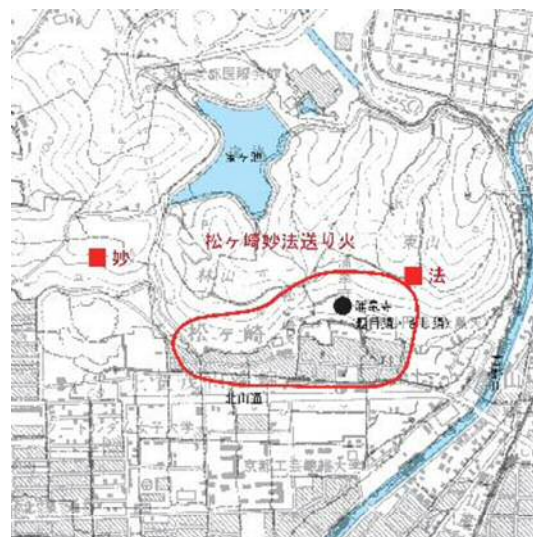


図2-19 松ヶ崎妙法送り火

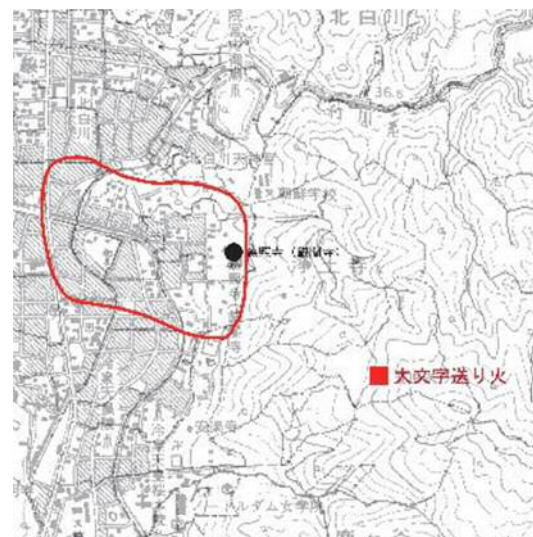


図2-20 大文字送り火



図2-21 左大文字送り火